



Title	How Original is Nishida Kitarō's Philosophy in An Inquiry into the Good? A Critical Investigation of Japan's 'First' Philosophy [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	Stone, Richard Hammond
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第14561号
Issue Date	2021-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/81226
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Richard_Stone_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： リチャード・ハモンド・ストーン

学位論文題名

How Original is Nishida Kitarō's Philosophy in *An Inquiry into the Good*?

A Critical Investigation of Japan's 'First' Philosophy

（『善の研究』における西田幾多郎の哲学はどれほど独創的か？

日本「最初の」哲学をめぐる批判的研究）

・本論文の観点と方法

本論文は、西田幾多郎の哲学が多くの研究者により「日本で最初の独創的な哲学」と評されてきた言説の歴史を踏まえ、その妥当性を批判的に検討したものである。本論文ではとりわけ西田以前の明治の思想家・哲学者たちの著作に西田哲学と通じる内容が見られる点に注目し、井上円了、福沢諭吉、大西祝、綱島梁川、三宅雪嶺などを範例的に取り上げつつ、先行する哲学者との連続性と差異を具体的に検討している。その際、表面的な比較にとどまることなく、西田自身のテキストの哲学的内容の分析に絶えず立ち帰り、哲学的観点からその独自性の意義と程度を吟味している点に特徴がある。この方法により、本論文は、西田の前期哲学を明治の哲学の時代的潮流の中に位置づけた上で、『善の研究』には先行する哲学者からの主に表現上の影響が見られるにもかかわらず、すでにその影響を脱し、中期・後期哲学への展開を準備する明確な転換が見られると論じている。

・本論文の内容

本論文は序論と三つの章、および結論からなる。

第一章では、西田前期哲学の中心概念である「純粹経験」の概念を取り上げ、明治時代の哲学の大きなテーマの一つであった「現象即実在」論との関係において、「純粹経験」論が「近代日本哲学の独創的な始まり」というしばしば見られる評価をどこまで満たしうるのかを吟味している。その際、現象即実在論の最初の提唱者とも言われる井上円了の哲学を範例的に取り上げ、西田哲学との類似性と差異をテキストに即して検討している。その作業を通して、本論文は、前期西田哲学が一方では明らかに井上哲学と内容上同系列の思想を展開しているが、他方で同時に、哲学的議論を展開する際の方法論と態度において、井上とは明確に異なる哲学上の意義が見いだせると主張する。観念論と実在論のどちらも極端な立場でありながら、それらはどちらも真剣に受けとられるべき現実の見方であり、根底にあるつかみがない統一の二つのアスペクトであるという見方は、すでに井上円了の哲学に示されており、この点は西田の純粹経験論にも共通している。他方、井上の哲学では、二つの極端な立場が互いに否定され根底の統一が示唆されるが、それが何であるか、どのような性格をもつかは明示されておらず、それに対する明確で体系的な説明が欠けている。西田はこの問題点を課題として引き受け、そこに体系的で一貫した方法的原理として「純粹経験」を持ち込んだ。これによって西田は、「現実」の概念をより論理的に一貫した仕方で提示し、生きた体験の現われである様々な矛盾する立場のダイナミックな相互作用を統一的に描いていく道を開いた。この点において、前期西田哲学には、西田以後の日本哲学に対する独創的な貢献が見てとれる、と第一章では論じている。

第二章では、前期西田の倫理学を取り上げている。先行研究において、『善の研究』に見られる倫理学は、当時の倫理学説の要約と T. H. グリーンらの「自己実現」説の反復にとどまり、あまり独創的ではないと見なされてきた。これに対し本論文では、グリーンらの自己実現説の影響を受けた様々な明治思想の流れの中に西田の前期倫理学が位置づけられることを認めつつ、そこにはすでに、先行する明治思想家たちとの微妙だが決定的な差異が見てとれると論じる。

近代国家を作ろうとする明治日本の動きのなかで、個人と国家との関係が盛んに論じられたが、この問題に対する一つの応答としてグリーンの「自己実現」説が取り上げられ、明治の思想家にはその様々なヴァリエーションが見られる。それによれば、共通善に貢献するように個人が自己を実現するのが人類の目標であるとされる。前期西田の倫理学にも、明らかにこれと同種の思想が見てとれる。純粹経験は超個体的なものであり、純粹経験の発展は、個人的自己の実現であると同時に、超個体的な人格的意識の実現でもあるとされる。しかし他方で、前期西田哲学は、彼以後の近代日本の倫理学に、二つの点で独創的な貢献をしていると本論文は主張する。第一に、自己実現説にもとづく倫理学上の議論に体系的な基礎を与えた点、第二に、「自己」の実存的・美的側面に着目した点である。第一に、西田によれば、純粹経験は本来的に「理性的」であり、調和への傾向を内包している。それゆえ、自己実現は、より合理的で理想的な調和の追求として、純粹経験の構造そのものに統合されていると解釈できる。このような仕方では西田は自己実現説に、それまで欠けていた合理的な理論的基盤を提供している。第二に、前期西田の倫理学は理論的で構造的な定式化と美的なものとの結合した魅力を備えているという。西田の純粹経験論は、個人を国家の一員・道徳的主体・権利主体などと捉えるのではなく、逃れがたい実存的不安に直面する生きた個人として捉える。これが倉田百三や西谷啓治といった当時の若者に多大な影響を与え、時代の中で新たな役割を担ったと本論文は指摘する。

第三章では、西田の自己論が取り上げられている。西田の純粹経験は、個人に先立ち、個の範囲に限定されないとされ、個人の中に閉じ込められることから解放を哲学的に根拠づけたものとして、当時の日本で大きな影響力をもったが、この思想も、西田に先立つ明治の思想家たちにも共通に見られる考え方を背景としている。明治の哲学には、小さな自己が大きな全体（国家的意識・人類一般・実在そのものなど）の一部を成すという考え方が広く見られる。三宅雪嶺などに見られるように、小我を忘れて大我との神秘的合一に至ることを肯定的に論じる思想も登場した。このように、小我と大我の包含関係の思想を西田哲学の独創とすることはできない。本論文は、むしろ『善の研究』が、この思想から離れて、中期以降の思想へと発展していく萌芽を含んでいたと論じる。幾つかの箇所では、自己における普遍的なものは、個から切り離せず、個によってのみ実現される「隠れた力」とであるとされる。本論文ではそれを、経験そのものの構造的枠組み、個によってのみ動的に実現されていく「関数」のようなものとして解釈する。

結論部では、第三章の最後で解釈された西田の思想が、『善の研究』に続く『自覚に於ける直観と反省』における自覚論、さらには「場所」の思想へと展開していくことが示唆される。『善の研究』には、これらの思想の萌芽が見られるが、それが全面的に展開されるには、「小我と大我との神秘的合一」といった仕方では定式化される先人の思想から袂を分かち必要があった、と本論文は結論づけている。

総じて、『善の研究』には、それに先立つ明治の哲学の息吹が濃厚に反映されており、前期西田哲学は、一連の発展を遂げた明治思想の最終形態という意義をもつ。このような連続性と同時に、本論文は、『善の研究』がそれ以後の近代日本哲学をそれ以前の明治哲学から切り離す画期を成しているという意味での「非連続性」をも主張している。このような「非連続の連続」をテキストに即して具体的に提示することによってこそ、西田哲学が無から生まれた独創的哲学であるかのように喧伝する実態に即さない言明からも、逆に西田哲学が明治哲学の一亜種にすぎないとするやはり不適切な解釈からも距離をとることが可能になる、と本論文は結論づけている。